

「カンダ・サンユッタ」の主題(1)

羽矢 辰夫[※]

はじめに

筆者は原始仏教におけるドウッカ（苦）の意味、およびドウッカに関連する思想について、あらためて考察を深め、できれば見直しを図りたいと考えている。これについては、すでにいくつかの論考を発表してきた¹⁾。

さて、『サンユッタ・ニカーヤ』の「カンダ・サンユッタ」は15章158経で構成されている。主に説かれているのは文字通り、カンダ（蘊、集まり）に関する教説である。筆者がとくに注目したいのは、ドウッカをそのなかに含む、いわゆる「無常・苦・非我」説がさまざまな形式で説かれている点である。従来はその部分だけを取りあげて解説ないし説明するだけで、十分な考察はなされてこなかった。ドウッカの意味や「無常・苦・非我」説に関わる議論をさらに進めるためには、「カンダ・サンユッタ」に説かれる教説を精査し、それらとドウッカの意味や「無常・苦・非我」説との関連を、より幅広い文脈のなかで捉えなおす必要がある。本稿ではまず第1章に説かれる教説を整理して、応分の考察を加えることにする。順次、章を追って考察を深めていく予定である。

なお、テキストはPTS版を使用し、訳出に際しては、記述を簡明にするために、くり返しの部分はまとめ、省略できる部分は省略することにする。

1. 第1章「ナクラの父」の概要

第1経 ナクラの父

年老いたナクラの父が世尊から教えを受ける。「あなたはこうに学ぶべきである。すなわち、わたしの身体は病気であっても、わたしの心は病気でなくあろう、と。」

尊者サーリプッタにこのことを話すと、尊者サーリプッタはこういった。「あなたは世尊に重ねて質問しなかったのか。すなわち、「身体が病み、心が病むとは、どういうことなのですか。身体が病んでも、心は病まないとは、どういうことなのですか」と。」

その意味をナクラの父に請われて、尊者サーリプッタが解説する。

「身体が病み、心が病むとは、どういうことか。

凡夫は色〔・受・想・行・識〕を我であると見、我は色〔・受・想・行・識〕を所有していると見、我のなかに色〔・受・想・行・識〕を見、色〔・受・想・行・識〕のなかに我を見る。わたしは色〔・受・想・行・識〕である、色〔・受・想・行・識〕はわたしのものであると執らわれてしまう。わたしは色〔・受・想・行・識〕である、色〔・受・想・行・識〕はわたしのものであると執らわれていても、その色〔・受・想・行・識〕は変化し変異する。色〔・受・想・行・識〕が変化し変異することにより、かれに愁い・悲しみ・苦しみ・憂い・悩みが生じる。

身体が病んでも、心は病まないとは、どういうことか。

聖弟子は色〔・受・想・行・識〕を我であると見ず、我は色〔・受・想・行・識〕を所有していると見ず、我のなかに色〔・受・想・行・識〕を見ず、色〔・受・想・行・識〕のなかに我を見ない。わたしは色〔・受・想・行・識〕である、色〔・受・想・行・識〕はわたしのものであると執らわれない。わたしは色〔・受・想・行・識〕である、色〔・受・想・行・識〕はわたしのものであると執らわれないまま、その色〔・受・想・行・識〕は変化し変異する。色〔・受・想・行・識〕が変化し変異しても、

かれに愁い・悲しみ・苦しみ・憂い・悩みは生じない。」

第2経 デーヴァダハ

西の地方に向かう多くの修行僧たちに、尊者サーリプッタがいった。「異国には王族の賢者もバラモンの賢者も、それに家の主人の賢者も沙門の賢者もいる。かれら思索する賢者たちは、異国に行った修行僧たちに質問するであろう。「尊者たちの師は何を論じ、何を説く方ですか」と。このように問われたら、あなたたちはこう答えるべきである。「わたしたちの師は欲望と食欲の調伏を説く」と。

「尊者たちの師は何に対する欲望と食欲の調伏を説くのですか」と問われたら、「わたしたちの師は色〔・受・想・行・識〕に対する欲望と食欲の調伏を説く」と答えるべきである。

「尊者たちの師はどのような患いを見て、色〔・受・想・行・識〕に対する欲望と食欲の調伏を説くのですか」と問われたら、「色〔・受・想・行・識〕に対して食欲を離れず、欲望を離れず、愛着を離れず、渴望を離れず、熱悩を離れず、渴愛を離れない者には、その色〔・受・想・行・識〕が変化し変異することにより、愁い・悲しみ・苦しみ・憂い・悩みが生じる。わたしたちの師はこの患いを見て、色〔・受・想・行・識〕に対する欲望と食欲の調伏を説く」と答えるべきである。

「尊者たちの師はどのような功德を見て、色〔・受・想・行・識〕に対する欲望と食欲の調伏を説くのですか」と問われたら、「色〔・受・想・行・識〕に対して食欲を離れ、欲望を離れ、愛着を離れ、渴望を離れ、熱悩を離れ、渴愛を離れた者には、その色〔・受・想・行・識〕が変化し変異しても、愁い・悲しみ・苦しみ・憂い・悩みは生じない。わたしたちの師はこの功德を見て、色〔・受・想・行・識〕に対する欲望と食欲の調伏を説く」と答えるべきである。

善くないことを身につけている者は、この世で不幸にすぎ、悩まされ、悩みがあり、苦悩があり、さらに身体が壊れてから、死後に悪いところに行くことが見込まれる。それゆえ、世

尊はもろもろの善くないことを捨てることを称賛するのである。

善いことを身につけている者は、この世で幸福にすぎ、悩まされず、悩みがなく、苦悩がなく、さらに身体が壊れてから、死後に善いところに行くことが見込まれる。それゆえ、世尊はもろもろの善いことを身につけることを称賛するのである。」

第3経 ハーリッディカーニ（1）

尊者マハーカッチャーナが『スッタニパータ』『義品』『マーガンディヤの問い』に関するハーリッディカーニの質問に答える。

「色〔・受・想・行〕という要素が識の家である。そして識が色〔・受・想・行〕という要素に対する食欲に縛られると、家がある者、といわれる。色〔・受・想・行・識〕という要素に対する欲望、食欲、歓喜、渴愛、接近と取著、心の執持、執着、煩悩は如来において捨てられ、根が断たれ根なしにされたターラ樹のように、存在しないものにされ、未来に生じないものである。それゆえ如来は、家がない者、といわれる。

色〔・声・香・味・触・法〕にもとづいた住処をさまよい縛られていると、住処がある者、といわれる。色〔・声・香・味・触・法〕にもとづいた住処をさまよい縛られることは如来において捨てられ、根が断たれ根なしにされたターラ樹のように、存在しないものにされ、未来に生じないものである。それゆえ如来は、住処がない者、といわれる。

ある者がもろもろの欲望の対象に対する食欲を離れず、欲望を離れず、愛着を離れず、渴望を離れず、熱悩を離れず、渴愛を離れない。もろもろの欲望の対象を離れないとは、こういうことである。ある者がもろもろの欲望の対象に対する食欲を離れ、欲望を離れ、愛着を離れ、渴望を離れ、熱悩を離れ、渴愛を離れる。もろもろの欲望の対象を離れるとは、こういうことである。

「わたしは将来このような色〔・受・想・行・識〕をもつ者でありたい」と考える。未来に望

みをかけるとは、こういうことである。「わたしは将来このような色〔・受・想・行・識〕をもつ者でありたい」と考えない。未来に望みをかけないとは、こういうことである。」

第4経 ハーリッディカーニ（2）

尊者マハーカッチャーナが「帝釈の問い」に関するハーリッディカーニの質問に答える。

「色〔・受・想・行・識〕という要素に対する欲望、貪欲、歓喜、渴愛、接近と取著、心の執持、執着、煩惱を滅尽し、染まらず、消滅させ、捨て、放棄することにより、心はよく解脱したといわれる。以上が、世尊が「帝釈の問い」のなかで説いたことである。」

第5経 三昧

「修行僧たちよ、三昧を修習しなさい。三昧に入った修行僧は色〔・受・想・行・識〕の生起と消滅をありのままに知る。

色〔・受・想・行・識〕の生起とは何か。ここに、色〔・受・想・行・識〕を大いに喜び、大いに語り、執着している者がいる。色〔・受・想・行・識〕を大いに喜び、大いに語り、執着しているかれには、歓喜が生じる。色〔・受・想・行・識〕に対する歓喜が取著である。その取著を縁として生存がある。生存を縁として生まれがある。生まれを縁として老い・死・愁い・悲しみ・苦しみ・憂い・悩みが生じる。このようにしてこのあらゆる苦しみの集まりの生起がある。

色〔・受・想・行・識〕の消滅とは何か。ここに、色〔・受・想・行・識〕を大いに喜ばず、大いに語らず、執着しないでいる者がいる。色〔・受・想・行・識〕を大いに喜ばず、大いに語らず、執着しないでいるかれには、色〔・受・想・行・識〕に対する歓喜は消滅する。その歓喜の消滅により取著が消滅する。取著の消滅により生存が消滅する。生存の消滅により生まれが消滅する。生まれの消滅により老い・死・愁い・悲しみ・苦しみ・憂い・悩みが消滅する。このようにしてこのあらゆる苦しみの集まりの消滅がある。」

第6経 独座

「修行僧たちよ、独坐にて瞑想しなさい。独坐する修行僧は色〔・受・想・行・識〕の生起と消滅をありのままに知る。」〔以下、〕前経と同じようである²⁾。

第7経 取著による恐怖（1）

「取著があると恐怖があるとは、どういうことか。

凡夫は色〔・受・想・行・識〕を我であると見、我は色〔・受・想・行・識〕を所有していると見、我のなかに色〔・受・想・行・識〕を見、色〔・受・想・行・識〕のなかに我を見る。その色〔・受・想・行・識〕は変化し変異する。色〔・受・想・行・識〕が変化し変異することにより、かれに色〔・受・想・行・識〕の変化にともなう認識が生じる。かれには色〔・受・想・行・識〕の変化にともなう〔認識によって〕生じた恐怖があり、もろもろの思考が生起し心を占拠してとどまる。心が占拠されることにより、さらに恐れをもち、困惑し、期待し、取著し、恐怖する。

取著がないと恐怖がないとは、どういうことか。

聖弟子は色〔・受・想・行・識〕を我と見ず、我は色〔・受・想・行・識〕を所有していると見ず、我のなかに色〔・受・想・行・識〕を見ず、色〔・受・想・行・識〕のなかに我を見ない。その色〔・受・想・行・識〕は変化し変異する。色〔・受・想・行・識〕が変化し変異しても、かれに色〔・受・想・行・識〕の変化にともなう認識は生じない。かれには色〔・受・想・行・識〕の変化にともなう〔認識によって〕生じた恐怖はなく、もろもろの思考が生起し心を占拠してとどまることがない。心が占拠されないことにより、さらに恐れをもたず、困惑せず、期待せず、取著せず、恐怖しない。」

第8経 取著による恐怖（2）

「取著があると恐怖があるとは、どういうことか。

凡夫は色〔・受・想・行・識〕を、これはわ

たしのものである、わたしはこれである、これはわたしの我であると見る。その色〔・受・想・行・識〕は変化し変異する。色〔・受・想・行・識〕が変化し変異することにより、かれに愁い・悲しみ・苦しみ・憂い・悩みが生じる。

取著がないと恐怖がないとは、どういうことか。

聖弟子は色〔・受・想・行・識〕を、これはわたしのものではない、わたしはこれではない、これはわたしの我ではないと見る。その色〔・受・想・行・識〕は変化し変異する。色〔・受・想・行・識〕が変化し変異しても、かれに愁い・悲しみ・苦しみ・憂い・悩みが生じることはない。」

第9経 過去・未来・現在（1）

「過去・未来の色〔・受・想・行・識〕は無常である。現在の色〔・受・想・行・識〕はいうまでもない。このように見て、聖弟子は過去の色〔・受・想・行・識〕について省みない。未来の色〔・受・想・行・識〕をおおいに喜ばない。現在の色〔・受・想・行・識〕を厭い、染まらず、滅するために修行する。」

第10経 過去・未来・現在（2）

「過去・未来の色〔・受・想・行・識〕は苦しみである。現在の色〔・受・想・行・識〕はいうまでもない。このように見て、聖弟子は過去の色〔・受・想・行・識〕について省みない。未来の色〔・受・想・行・識〕をおおいに喜ばない。現在の色〔・受・想・行・識〕を厭い、染まらず、滅するために修行する。」

第11経 過去・未来・現在（3）

「過去・未来の色〔・受・想・行・識〕は非我である。現在の色〔・受・想・行・識〕はいうまでもない。このように見て、聖弟子は過去の色〔・受・想・行・識〕について省みない。未来の色〔・受・想・行・識〕をおおいに喜ばない。現在の色〔・受・想・行・識〕を厭い、染まらず、滅するために修行する。」

2. 第1章「ナクラの父」の教説の整理と考察

以下で使用する記号は筆者が独自につけたものであり、つぎのような意味を表わす。

(A) 我見 (B) 我執 (C) 欲望 (D) 変化や変異（無常） (E) 愁い・悲しみ・苦しみ・憂い・悩みが生じる

(a) 我見がない (b) 我執がない (c) 欲望がない (d) = (D) 変化や変異（無常）

(e) 愁い・悲しみ・苦しみ・憂い・悩みが生じない (f) 修行

第1経ではまず、身体が病み、心が病む、ということが説かれる。

(A)「凡夫は色〔・受・想・行・識〕を我であると見、我は色〔・受・想・行・識〕を所有していると見、我のなかに色〔・受・想・行・識〕を見、色〔・受・想・行・識〕のなかに我を見る。」

これは「我見」であり、凡夫の心の根底にある見方である。

(B)「わたしは色〔・受・想・行・識〕である、色〔・受・想・行・識〕はわたしのものであると執られてしまう。」

これは「我執」であり、凡夫の心の根底にある執られである。「我見」という見方があり、「我執」という執られがある。

(D)「わたしは色〔・受・想・行・識〕である、色〔・受・想・行・識〕はわたしのものであると執られていても、その色〔・受・想・行・識〕は変化し変異する。」

これは変化し変異する色〔・受・想・行・識〕の現実のあり方である。

(E)「色〔・受・想・行・識〕が変化し変異することにより、かれに愁い・悲しみ・苦しみ・憂い・悩みが生じる。」

これは「我見」ないし「我執」と、変化し変異する色〔・受・想・行・識〕の現実のあり方とのギャップによる苦悩の生じ方を表わしている。永遠の我であり、不変の我である、と執られている色〔・受・想・行・識〕が変化し変異することへの不条理感、理不尽感ともいえる。「思うようになる」はずの色〔・受・想・行・

識]が、現実には「思うようにならない」のである。つまり、身体が病むとは、色〔・受・想・行・識〕が変化し変異するということであり、心が病むとは、愁い・悲しみ・苦しみ・憂い・悩みが生じるということである。

つぎに、身体が病んでも、心は病まない、ということが説かれる。

(a)「聖弟子は色〔・受・想・行・識〕を我であると見ず、我は色〔・受・想・行・識〕を所有しているの見ず、我のなかに色〔・受・想・行・識〕を見ず、色〔・受・想・行・識〕のなかに我を見ない。」

これは、聖弟子には心の根底に「我見」という見方がない、ということである。

(b)「わたしは色〔・受・想・行・識〕である、色〔・受・想・行・識〕はわたしのものであると執らわれない。」

これは、聖弟子には心の根底に「我執」という執らわれない、ということである。「我見」がなく、「我執」もないのである。

(D)「わたしは色〔・受・想・行・識〕である、色〔・受・想・行・識〕はわたしのものであると執らわれないまま、その色〔・受・想・行・識〕は変化し変異する。」

これは変化し変異する色〔・受・想・行・識〕の現実のあり方である。「我執」に執らわれていても、執らわれていなくても、色〔・受・想・行・識〕は変化し変異するのである。

(e)「色〔・受・想・行・識〕が変化し変異しても、かれに愁い・悲しみ・苦しみ・憂い・悩みは生じない。」

「我見」ないし「我執」がなければ、変化し変異する色〔・受・想・行・識〕の現実のあり方とのあいだにギャップはなく、苦悩は生じない。永遠の我であり、不変の我である、と執らわれていなければ、たとえ色〔・受・想・行・識〕が変化し変異したとしても、不条理感も理不尽感もないのである。「思うようになる」はずもない色〔・受・想・行・識〕が、「思うようにならない」からといって、何の問題も生じないであろう。つまり、身体が病んでもとは、色〔・受・想・行・識〕が変化し変異してもということである。

あり、心は病まないとは、愁い・悲しみ・苦しみ・憂い・悩みが生じないということである。

ここでは、色〔・受・想・行・識〕は変化し変異するものであるという現実に対して、「我見」や「我執」をもって臨むかどうか問われている。「我見」や「我執」をもって臨む者には苦悩が生じ、「我見」や「我執」をもって臨まない者には苦悩は生じないのである。

変化や変異そのものは苦しみでもなんでもない。あるいは、変化や変異そのものが苦しみをもたらすものでもない。変化や変異を「無常」と読みかえると、無常であることそのものは苦しみでもなんでもない。あるいは無常であることそのものが苦しみをもたらすものでもない。このようにみると、「無常は苦か、楽か」と問われて、「苦です」と答えるのは、少なくともこの第1経をみるかぎりには、論理的な整合性をもたない。

第2経では、世尊は何を説くのか、ということが説かれる。

(C)「色〔・受・想・行・識〕に対して貪欲を離れず、欲望を離れず、愛着を離れず、渴望を離れず、熱悩を離れず、渴愛を離れない者は、

(DE) その色〔・受・想・行・識〕が変化し変異することにより、愁い・悲しみ・苦しみ・憂い・悩みが生じる。

(c f) わたしたちの師はこの患いを見て、色〔・受・想・行・識〕に対する欲望と貪欲の調伏を説く。」

ここでは、「我見」や「我執」ではなく、それから派生する「欲望」や「貪欲」があると、色〔・受・想・行・識〕の変化や変異によって、愁い・悲しみ・苦しみ・憂い・悩みが生じることが説かれる。第1経のように、「我見」や「我執」があると愁い・悲しみ・苦しみ・憂い・悩みが生じ、「我見」や「我執」がないと愁い・悲しみ・苦しみ・憂い・悩みは生じない、という条件関係だけを提示するにとどまらず、より実践的に、「欲望」や「貪欲」を離れないと愁い・悲しみ・苦しみ・憂い・悩みが生じるので、生じさせな

いために「欲望」や「食欲」の調伏を説いている。すなわち、「欲望」や「食欲」を調伏すれば「欲望」や「食欲」を離れられるので、たとえ色〔・受・想・行・識〕が変化し変異しても、愁い・悲しみ・苦しみ・憂い・悩みは生じないのである。それは以下のようにも説かれる。

(c)「色〔・受・想・行・識〕に対して食欲を離れ、欲望を離れ、愛着を離れ、渴望を離れ、熱悩を離れ、渴愛を離れた者には、

(De) その色〔・受・想・行・識〕が変化し変異しても、愁い・悲しみ・苦しみ・憂い・悩みは生じない。

(cf) わたしたちの師はこの功德を見て、色〔・受・想・行・識〕に対する欲望と食欲の調伏を説く。」

「欲望」や「食欲」を調伏することは、愁い・悲しみ・苦しみ・憂い・悩みを生じさせないための一つの方法論といえる。

また、「善」を身につけ、「不善」を捨てることが称賛される。「善」や「不善」が具体的に何を指すのかという点については説かれていない。「善くないことを身につけている者は、この世で不幸にすぎし、悩まされ、悩みがあり、苦悩があり、さらに死後に悪いところに行くことが見込まれる。それゆえ、世尊はもろもろの善くないことを捨てることを称賛するのである。

善いことを身につけている者は、この世で幸福にすぎし、悩まされず、悩みがなく、苦悩がなく、さらに死後に善いところに行くことが見込まれる。それゆえ、世尊はもろもろの善いことを身につけることを称賛するのである。」

第3経は「マーガンディヤの問い」に関する解説である。

(C)「色〔・受・想・行〕という要素が識の家である。そして識が色〔・受・想・行〕という要素に対する食欲に縛られると、家がある者、といわれる。」

(c)「色〔・受・想・行・識〕という要素に対する欲望、食欲、歓喜、渴愛、接近と取著、心の執持、執着、煩悩は如来において捨てられ、根が断たれ根なしにされたターラ樹のように、

存在しないものにされ、未来に生じないものである。それゆえ如来は、家がない者、といわれる。」

(C)「色〔・声・香・味・触・法〕にもとづいた住処をさまよい縛られていると、住処がある者、といわれる。住処がある者とは、こういうことである。」

(c)「色〔・声・香・味・触・法〕にもとづいた住処をさまよい縛られることは如来において捨てられ、根が断たれ根なしにされたターラ樹のように、存在しないものにされ、未来に生じないものである。それゆえ如来は、住処がない者、といわれる。住処がない者とは、こういうことである。」

ここで注目したいのは、如来においては色〔・受・想・行・識〕に対する「欲望」や「食欲」が捨てられている、という点である。それはたとえば、「根が断たれ根なしにされたターラ樹のように、存在しないものにされ、未来に生じないものである」。根が断たれるのは色〔・受・想・行・識〕に対する「欲望」や「食欲」である。(別の箇所では、根が断たれるのは色〔・受・想・行・識〕そのものである、と説かれることもある。)

(C)「ここに、ある者がもろもろの欲望の対象に対する食欲を離れず、欲望を離れず、愛着を離れず、渴望を離れず、熱悩を離れず、渴愛を離れない。もろもろの欲望の対象を離れないとは、こういうことである。」

(c)「ここに、ある者がもろもろの欲望の対象に対する食欲を離れ、欲望を離れ、愛着を離れ、渴望を離れ、熱悩を離れ、渴愛を離れる。もろもろの欲望の対象を離れるとは、こういうことである。」

ここでもまた、もろもろの欲望の対象を離れないということは、もろもろの欲望の対象に対する「欲望」や「食欲」を離れないということであり、もろもろの欲望の対象を離れるということは、もろもろの欲望の対象に対する「欲望」や「食欲」を離れるということである、ということが説かれる。(欲望の対象そのものを離れる、とも解釈できる。)

「捨てる」「離れる」という表現が用いられているが、色〔・受・想・行・識〕そのものや欲望の対象そのものを捨てたり、離れるのではなく、それらに対する「欲望」や「食欲」を捨てたり、離れたりするという意味で用いられているのである。

(B C)「わたしは将来このような色〔・受・想・行・識〕をもつ者でありたい」と考える。未来に望みをかけるとは、こういうことである。」

(b c)「わたしは将来このような色〔・受・想・行・識〕をもつ者でありたい」と考えない。未来に望みをかけないとは、こういうことである。」

将来の色〔・受・想・行・識〕について、自分の「思うようになりたい」と望むことと望まないことが説かれる。後者を言いかえると、色〔・受・想・行・識〕は自分の「思うようにならない」と了解することともいえる。「我執」と「我見」とが混在しているようである。輪廻との関わりについては、これだけでは判断しがたい。

第4経は「帝釈の問い」に関する解説である。

(c)「色〔・受・想・行・識〕という要素に対する欲望、食欲、歓喜、渴愛、接近と取著、心の執持、執着、煩惱を滅尽し、染まらず、消滅させ、捨て、放棄することにより、心はよく解脱したといわれる。」

ここでは、第3経に説かれているように、色〔・受・想・行・識〕に対する「欲望」や「食欲」を捨てること、あるいは染まらないこと、あるいは消滅させることが説かれている。それによって「心はよく解脱したといわれる」という。色〔・受・想・行・識〕に対する「欲望」や「食欲」を捨てるのが、そのまま心の解脱であるかのようである。心が色〔・受・想・行・識〕に対する「欲望」や「食欲」から解放されている、という意味なのであろう。

第5経では、三昧に入った修行僧は色〔・受・想・行・識〕の生起と消滅をありのままに知る、ということが説かれる。

「色〔・受・想・行・識〕の生起とは何か。

ここに、色〔・受・想・行・識〕を大いに喜び、大いに語り、執着している者がいる。色〔・受・想・行・識〕を大いに喜び、大いに語り、執着しているかれには、歓喜が生じる。色〔・受・想・行・識〕に対する歓喜が取著である。その取著を縁として生存がある。生存を縁として生まれがある。生まれを縁として老い・死・愁い・悲しみ・苦しみ・憂い・悩みが生じる。このようにしてこのあらゆる苦しみの集まりの生起がある。

色〔・受・想・行・識〕の消滅とは何か。ここに、色〔・受・想・行・識〕を大いに喜ばず、大いに語らず、執着しないでいる者がいる。色〔・受・想・行・識〕を大いに喜ばず、大いに語らず、執着しないでいるかれには、色〔・受・想・行・識〕に対する歓喜は消滅する。その歓喜の消滅により取著が消滅する。取著の消滅により生存が消滅する。生存の消滅により生まれが消滅する。生まれの消滅により老い・死・愁い・悲しみ・苦しみ・憂い・悩みが消滅する。このようにしてこのあらゆる苦しみの集まりの消滅がある。」

色〔・受・想・行・識〕の生起と消滅についての説明が、苦しみの生起と消滅にすり替えられている。色〔・受・想・行・識〕が苦しみである、と解釈できれば問題ないが、そのような解釈はこの文脈では無理がある。十二因縁の項目も入っていて、混乱が少なからず起こっているようである。

第6経でも同じく、独坐する修行僧は色〔・受・想・行・識〕の生起と消滅をありのままに知る、ということが説かれる。省略されているが、第5経と同じようなすり替えがあると思われる。

第7経では、取著があると恐怖があるということと、取著がないと恐怖がないということが説かれる。

(A)「凡夫は色〔・受・想・行・識〕を我であると見、我は色〔・受・想・行・識〕を所有していると見、我のなかに色〔・受・想・行・

識]を見、色〔・受・想・行・識〕のなかに我を見る。」

(D)「その色〔・受・想・行・識〕は変化し変異する。」

(E)「色〔・受・想・行・識〕が変化し変異することにより、かれに色〔・受・想・行・識〕の変化にともなう認識が生じる。かれには色〔・受・想・行・識〕の変化にともなう〔認識によって〕生じた恐怖があり、もろもろの思考が生起し心を占拠してとどまる。心が占拠されることにより、さらに恐れをもち、困惑し、期待し、取著し、恐怖する。」

ここで説かれていることは、第1経で説かれた、「我見」があると色〔・受・想・行・識〕が変化し変異することにうまく対応できず、愁い・悲しみ・苦しみ・憂い・悩みが生じる、という教説に近い。愁い・悲しみ・苦しみ・憂い・悩みの代わりに、恐怖が置かれているだけである。「我見」があると、色〔・受・想・行・識〕の変化や変異にともなう認識によって恐怖が生じ、思考が心を占拠して恐怖を増幅させるのである。

(a)「聖弟子は色〔・受・想・行・識〕を我と見ず、我は色〔・受・想・行・識〕を所有していると見ず、我のなかに色〔・受・想・行・識〕を見ず、色〔・受・想・行・識〕のなかに我を見ない。」

(D)「その色〔・受・想・行・識〕は変化し変異する。」

(e)「色〔・受・想・行・識〕が変化し変異しても、かれに色〔・受・想・行・識〕の変化にともなう認識は生じない。かれには色〔・受・想・行・識〕の変化にともなう〔認識によって〕生じた恐怖はなく、もろもろの思考が生起し心を占拠してとどまることがない。心が占拠されないことにより、さらに恐れをもたず、困惑せず、期待せず、取著せず、恐怖しない。」

「我見」がなければ、色〔・受・想・行・識〕が変化し変異しても愁い・悲しみ・苦しみ・憂い・悩みは生じない、と説く第1経と同じように、恐怖が生じることはないのである。

第8経では、取著があると恐怖があるという

ことと、取著がないと恐怖がないということが説かれる。

(AB)「凡夫は色〔・受・想・行・識〕を、これはわたしのものである、わたしはこれである、これはわたしの我であると見る。」

(D)「その色〔・受・想・行・識〕は変化し変異する。」

(E)「色〔・受・想・行・識〕が変化し変異することにより、かれに愁い・悲しみ・苦しみ・憂い・悩みが生じる。」

(ab)「聖弟子は色〔・受・想・行・識〕を、これはわたしのものではない、わたしはこれではない、これはわたしの我ではないと見る。」

(D)「その色〔・受・想・行・識〕は変化し変異する。」

(e)「色〔・受・想・行・識〕が変化し変異しても、かれに愁い・悲しみ・苦しみ・憂い・悩みが生じることはない。」

恐怖がテーマのようであるが、内容的には第1経とほとんど同じである。ただし「色〔・受・想・行・識〕を、これはわたしのものである、わたしはこれである、これはわたしの我である」と見るか見ないかがポイントである。第1経では、「わたしは色〔・受・想・行・識〕である。色〔・受・想・行・識〕はわたしのものである」と執られることを「我執」に分類した。「これはわたしの我である」と見るのは「我見」に分類されるであろう。第1経の「我執」と「我見」の一部が組み合わされた形式で説かれているのである。

第9経では、過去・未来・現在の色〔・受・想・行・識〕の無常が説かれる。

(D)「過去・未来の色〔・受・想・行・識〕は無常である。現在の色〔・受・想・行・識〕はいうまでもない。」

(bc)「このように見て、聖弟子は過去の色〔・受・想・行・識〕について省みない。未来の色〔・受・想・行・識〕をおおいに喜ばない。」

(f)「現在の色〔・受・想・行・識〕を厭い、染まらず、滅するために修行する。」

これまでは、「色〔・受・想・行・識〕は変化

し変異する」という表現が用いられていたが、ここでは「無常」と言いかえられている。またこれまでは、捨てたり、離れたりする対象は「欲望」や「食欲」であったが、ここでは、滅する対象は「色〔・受・想・行・識〕」そのものである。そうであれば、過去・未来・現在という表現は輪廻と関わりがあるとみるべきであろう。とはいえ、厭い、染まらない対象でもあるので、「欲望」や「食欲」とも関わってはいるようである。さらに、「色〔・受・想・行・識〕」を無常であるとして、修行する、と説かれている点に注目したい。修行の成果として「色〔・受・想・行・識〕」が無常であるに見えるのではないということである。「色〔・受・想・行・識〕」が無常であるところから修行が始まるのである。修行の方法としての「無常」観としておきたい。

第10経では、過去・未来・現在の色〔・受・想・行・識〕の苦が説かれる。

(D?)「過去・未来の色〔・受・想・行・識〕は苦しみである。現在の色〔・受・想・行・識〕はいうまでもない。」

(b c)「このように見て、聖弟子は過去の色〔・受・想・行・識〕について省みない。未来の色〔・受・想・行・識〕をおおいに喜ばない。」

(f)「現在の色〔・受・想・行・識〕を厭い、染まらず、滅するために修行する。」

第9経とはほぼ同じ内容が説かれている。異なるのは、「色〔・受・想・行・識〕」を「苦しみ」と見るという点である。ここから修行が始まるのであって、修行の成果として「色〔・受・想・行・識〕」が苦しみであるに見えるのではないのは同様である。修行の方法としての「苦」観としておく。

ただし、この場合の「苦」の意味が従来どおりの「苦しみ」でよいのかという疑問が残る。なぜならば、第1経をはじめとして、「色〔・受・想・行・識〕」が変化し変異することそのものは苦しみでもなんでもなく、「我見」や「我執」によって愁い・悲しみ・苦しみ・憂い・悩みが生じる、と説かれているからである。なぜ「苦し

み」と見なければならぬのか、その理由がはっきりしない。

この場合の「苦」を「思うようにならない」という意味であるとする、「無常」は「常住である」という我の条件を否定し、「苦」は「主宰である」という我の条件を否定していると考えられ、つぎの第11経につながっていくように思われる。すなわち、「色〔・受・想・行・識〕」は我ではない、非我である、ということを順序だてて説いている、と解釈できるのではないかとということである。

第11経では、過去・未来・現在の色〔・受・想・行・識〕の非我が説かれる。

(a)「過去・未来の色〔・受・想・行・識〕は非我である。現在の色〔・受・想・行・識〕はいうまでもない。」

(b c)「このように見て、聖弟子は過去の色〔・受・想・行・識〕について省みない。未来の色〔・受・想・行・識〕をおおいに喜ばない。」

(f)「現在の色〔・受・想・行・識〕を厭い、染まらず、滅するために修行する。」

第9経、第10経とのつながりで説かれている。内容はまったく同じである。「無常」「苦」の部分が「非我」になっているだけである。これも修行の成果として「非我」と見えるようになるのではなく、ここから修行が始まるという点が重要である。修行の方法としての「非我」観である。

「無常・苦・非我」説の三つの項目が別々に並べられている。無常ないし無常観、苦ないし苦観、非我ないし非我観がそれぞれ独立して説かれているようにみえる。しかし、順序だてて考えると、無常であり、思うようにならない「色〔・受・想・行・識〕」は非我であり、我ではない、と見るのが説かれているように思われる。そのように見て「我見」を正し、「我執」をなくして、「欲望」や「食欲」を捨てれば、たとえ「色〔・受・想・行・識〕」が変化し変異しても、愁い・悲しみ・苦しみ・憂い・悩みは生じないのである。

小 結

以上のように、ドゥッカの意味ないし「無常・苦・非我」説を見直すためのヒントが多少とも見出されている。まず、色〔・受・想・行・識〕が変化し変異することそのものが愁い・悲しみ・苦しみ・憂い・悩みなのではなく、そこに「我見」や「我執」が関わることによって、愁い・悲しみ・苦しみ・憂い・悩みが生じるということである。無常であることそのものが苦しみであるわけではないのである。また、「無常」と「苦」と「非我」はそれぞれ独立して説かれているようであるが、じつは無常と苦は、色〔・受・想・行・識〕は非我であり、我ではない、と見るための導入として説かれているのではないかと推察される。もっと精緻な考察を展開して、

新しい発見につなげたいと考える。

(2012年11月30日受付、2013年1月30日受理)

註

- 1) 拙稿「サンユッタ・ニカーヤにおけるドゥッカ(1)」『青森公立大学紀要』12-2、2007年3月、31-40ページ。同「原始仏教思想研究におけるドゥッカ」『青森公立大学紀要』14-1、2008年9月、11-20ページ。同「原始仏教思想研究における欲望について」『印度学仏教学研究』59-1、2010年12月、(223)-(230) ページ。
- 2) テキストには「第1経のように、詳しく説かれるべきである」とあるが、内容により「前経のように」と判断した。